
奪われた日常

名無 権兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奪われた日常

【Nコード】

N6293X

【作者名】

名無 権兵衛

【あらすじ】

2020年政府は新たな法律を作りあげた。

その内容は人間の生活。そして日常を制限するというものだった。さらに制限された以外の行動を行うと、即座に射殺されると言ったものである。

しかもこの法律は政府側の人間には関係のないもの。

つまり一般人のみに与えられた無駄な法律だった。

こんな世界狂ってる。

国村圭一は必ずやこの狂った日本を、そして国民を救うと心に誓う。

一人の男と国との戦いが今始まる。

s t o r y ? 1 あの時の記憶（前書き）

駄作ですけど読んでみてください ^^
これから頑張って行きます ^^

story?1 あの時記憶

プロローグ

いつもと変わらぬ週末の土曜日。

その筈だった。

それは真夏の出来事だった。

ジリジリと照るつける日差しが、街を歩く人々のスタミナを奪っていく。

子どもたちが昼食を食べ終え、公園に出て遊ぶ午後1時過ぎ。

高層ビルが立ち並ぶ街の一角から、ただならぬ悲鳴が上がった…。

壁や絨毯に染みつき、黒々とした色の血痕。男の右手に握られた折りたたみ式のナイフから滴り落ちる血が、床に血液の水溜まりをつくった…。すぐそばには、一人の男の身体が横たわっていた。

ピクリとも動かない男を茫然と見つめる少年。

倒れている男の眼球は、エグりとられ、首を切り裂かれ、頭部を突き刺され、この世のものとは思ふ事の出来ない程の光景だった。

少年は理解出来ずに、ただ恐怖と言う感情に飲み込まれ、ひたすら涙を流した。

血に染まったナイフを持った男と、死んでいる男を交互に見ては泣き叫んだ……。

story?1 あの時記憶

一人の女性は、いつものように手際よく夕食を作っていた。女性が料理を作り終え、水道の蛇口を捻り手を洗う。

一部屋に二つは設置されてある監視カメラが女性を撮影し続けた。一瞬女性はカメラに気を取られ、チラリと視線をカメラに向けた。その為、そばに置いていた包丁に気づかず、肘をぶつけ床へと落としてしまった。

女性が「あっ！」と声を上げると同時に、金属音がキッチンに鳴り響いた。

その時、ただ撮影していただけただけの監視カメラの映像が何処かに送られていたのだろうか。

包丁を落としてから5分と経たぬ間に、玄関の扉が強引に開けられ、警備員と思われる男が入ってきた。

男は床に落ちている包丁を一目見てから、女性を見る。そして警備員は口元に笑みを浮かべた。

まるでこの時を心待ちにしていたかのように、警備員は腰から拳銃を取り出し、女性の眉間を躊躇なく撃ちぬいた。

血が飛び散り、女性はピクリと動かなくなりそのまま床に崩れ落ちた。

笑みを浮かべながら、血にまみれた女性の遺体を見つめる警備員。

その時、リビングで母の料理を待っていたのであろう少女が、銃声を聞きつけキッチンに入ってくる。

警備員は舌打ちをした後、顔が無表情へと戻した。

少女はキッチンに入ると同時に目に涙を浮かべ、「お母さん！」と叫んだ。

涙があふれ出し、動かなくなった母の体を何度も揺さぶる少女。しかし母の体は動くはずもない。

少女は怒りに満ち溢れた目つきで警備員を睨みつけると、母の横に落ちていた包丁を拾い、警備員へと向かって行く。

警備員は驚く様な素振りも見せず、もう一度銃を構え、引き金を引いた。

少女は母の隣に倒れ込み、そのまま意識を、そして命を失った…。

2033年7月27日

日に日に暑さ、そして気温は上がり続けてはいたが、この日は異常なほどに暑かった。

雲ひとつない快晴に、さらに暑さが増す。照りつける太陽がより一層暑く感じさせた。

手で顔周辺を仰ぐ者。コンビニの冷えたスポーツドリンクを口に含む者。

道行く女性は皆日傘をさしている。

そんな光景を見ながら、国村 圭一は自身の務め場所。

『成人日常制限法管理部』へと向かった。

向かうまでの間、圭一はある事について考えていた。

昨日一人の女性が”制限された事”以外の行動を行い、射殺されたのだ。

あんな理不尽な法律はいらない…。

圭一はいつの間にかあの日の事を思い浮かべていた。

政府がこの法律を国に発表してからもう13年の月日が流れた。

政府が発表した時の内容は、今でも脳裏に焼きつき、離れない。

完全に記憶し、忘れようとしても忘れる事は出来なかった。

「今国民の日常は、酷く悪影響な方向へと傾き始めている。人として生活するには不必要な日常すらみられる。年々殺人、自殺、大麻

所持、薬物依存などの行為は増え続けている。

所持、薬物依存などの行為は増え続けている。

今や国民の行う事に限りがない。どれもこれも我々政府の目が行き届いていないからである。

よってこれから新たに法律を作りたいと思う。国民の日常の全てにおいて制限いたします。制限された事以外を行った場合、行った人物は即座に射殺されます。

尚、この法律の対象となるのは成人を迎えた二十歳の国民です。二十歳の国民は四十歳になるまでの20年間がこの法律の対象となります。気をつけて行動してください」

この言葉は、発表後国民から数多くの批判を受け、2020年の総理大臣、加藤洋平は当然ながら総理を辞任。

その後新たな総理が決まったものの、この法律は承認され、翌年には『成人日常制限法』と言う名前まで作られた。

法律は初めのうちは元々あった今までの法律に基づき、しっかりとした内容の制限を行われていた。

そのまま10年間、日本は殺人、大麻所持、薬物によるものなどが極限に減り、平和な国であった。

しかし、10年間と言う長い月日が流れ、3年前、遂に総理が変わった。

それからだ。この国がおかしくなったのは…。

新たになった総理の名は伊藤銀司。この男が日本を狂わせた。

制限の内容が変貌し、今では水道の蛇口を捻ってはいけない、ある人は床に物を置いてはいけない、ある者は包丁を落としてはいけないなど理不尽極まりないものだった…。

「こんな世界…狂ってる…」

圭一は怒りに満ち溢れた言葉を小さく呟いた…。

s t o r y ? 1 あの時の記憶（後書き）

コメントなどお待ちしております！

s t o r y ? 2 国の抑止力（前書き）

前回までのあらすじ

2020年。政府は恐ろしい法律を発表した。『成人日常制限法』
10年後、新たに総理となった男の手によって、日本は理不尽極まりない国へと変貌する。こんな世界…狂ってる…。

story?2 国の抑止力

こんな世界：狂ってる…。圭一は口癖のように毎日そう呟きながら成人日常制限法管理部へと出社した。

同僚の名倉竜輝の姿が目に入り、気持ちを切り替え圭一は「よう」と手を上げ、軽くあいさつした。

名倉も「よう」と右手をあげ、圭一は名倉の隣の席に腰を下ろした。社内は涼しく、先程までの暑さがまるで嘘の様だ。

圭一はかいていた汗をタオルで拭い、その後目の前のモニターに目を移した。

モニターは4分割されており、一つ一つの画面に人が映されていた。画面の右下には、文字が書いてある。

圭一の仕事は、各家庭に設置された監視カメラを通し、あの”例の法律”の対象となっている人物を監視する事だ。

ただ監視する。そして制限された事以外の行動を行った人物がいた場合、すぐさま政府に雇われた特別警備員へと連絡する。たったそれだけが仕事の内容だった。

仕事の内容は簡単だが、その仕事の辛さは相当なものである。何と言っても、自分の連絡により人が殺されるのだ。

人殺しと言っても過言ではない。この職に就いている者の心情は皆同じだった。

圭一もほかの人間同様、このモニターを見るたびに、死んでいった人間の顔が鮮明に浮かんだ。

そして胸が抑えつけられ圧迫される様に苦しくなる。初めの内は呼吸が乱れ息をすることすら苦しかった。

特に圭一の様に優しい性格の者には辛すぎる仕事だった…。

その時、突如天井につけてあったランプが赤く光った。

「これは…」

圭一は呟く。これは誰かが制限外の行動を行い、特別警備員に報告

した時に起こるものだった。

無意識の内に隣を見る圭一。

報告したのは名倉だった。圭一は怒りと言う感情に支配されそうになる。

しかし圭一自身、昨日に一人の女性を通報し、殺しの報告を行ったのだ。張り裂けそうになる胸を押さえながら通報のボタンを押した事は、言うまでもない。

名倉も同じ気持ちなのだろう。怒りはいつの間にか恐怖へと変わった。

ランプが止まると同時に、天井から特別大きなモニターが降ろされ、そこに通報された人の姿が映し出される。

30代後半くらいの男性だった。画面の右端から警備員の姿が現れる。

圭一は目を逸らしたかった。しかし目を逸らせば自分自身も殺される。デスクに設置されたカメラが常に我々の表情を本部に送っているのだ。

成人日常制限法第2条に、『政府側の人間たるもの、違法者の結末を見届けなければならない』など馬鹿げた法律があるからだ。

もしも人が銃殺される姿を見届けなければ、自分自身も銃殺される。それはもはや政府側も一般人側も関係ない。『国』による圧倒的恐怖による支配だったのだ。

圭一は瞬きもせずモニターを見つめた。警備員が銃を構え、銃口を男に向ける。

男の悲鳴と銃声が重なり、血が飛び散った。

監視カメラにも血が付着し、一部見えなくなったが、崩れ落ちる男の遺体が圭一の目に焼きついた。

あまりにも惨い光景。圭一を含め、職場の人間は眼を逸らしたくても逸らせない辛い光景をただ見つめるしかなかった…。

story 3 総理殺害のプラン

モニターが上がり、また天井裏へと隠れる。

しかし、監視室にいた圭一を含む人々は、恐怖に怯え、動けなかった。

今まで何度も見てきたが、いまだに慣れない。

人の『死』と言う者に、慣れる人間の方が少ないだろう。

長い沈黙を一人の男が遂に破った。

「さ…さあ！ 皆すっかり仕事するんだ！」

部長の西垣 雄作だった。

手を叩きながら、自分のデスクに座り、仕事を始める西垣。

それを見た職員は、次々とデスクに座りモニターを見つめた。

圭一も周りにつられ、監視を開始した。

しかし圭一は仕事には、もちろん集中できるわけがなかった。

倒れた遺体の姿が脳裏に浮かぶ。

呻き声が今にも聞こえてきそうだ。

圭一は自分自身の想像力を恨み、恐怖の映像をかき消そうと別の事を考えた。

しかしいつの間にかやはり男性の姿を思い浮かべてしまう。

その後、圭一はただモニターを見つめるだけ。頭では全く別の事を考えていた。

この狂った国を救う。

そんな馬鹿げた事を…とは思いつつも、やはりその行動を本当に行おうか悩んでいる自分自身が心の何処かにいる。

その時、恐ろしい考えが頭を過ぎった。

あの総理を殺してしまおう。

そんな事を考えた自分に驚き、急いで気を紛らわせようと、今日の夕食は何にしようか。などと考えるが、瞬時に夕食のメニューは消え去り、総理を殺すと言う考えが頭に浮かぶ。

気がつけば圭一は総理を殺害するプランを考えていた…。

見据えた未来

圭一がふと時計を見ると、針はすでに夜の9時を指していた。

成人日常制限法管理部は24時間体制で人の監視を続けているが、12時間ごとにローテーションを行っている。

つまり勤務時間は1日12時間と言うわけだ。

圭一の場合は、朝9時から夜の9時までの12時間。

しかも週に3日は休日という、はつきり言ってもとても楽な仕事であった。

さらに月収は80万円と超高額である。

それほど人間の死を監視する仕事は辛いと言う事を政府も知っているのだろう。

圭一は管理部長の西垣に仕事内容の報告を終え、自宅に戻って行った。

しかし自宅に帰る道中も常に頭の中では、総理殺害のプランを練っていた。

我ながら恐ろしい事を考えている。そんなことは分かりきっているのだが、やはりこの国を元通りにするにはこの方法しかない…。

しかし心の何処かで、やはりまだ恐怖を感じている。

人の死を見るのではなく、自分が人を殺すのだ。

怖気づきそうにもなる。

しかし奴のせいで何十万人もの人間が犠牲になったと思えば、殺す事を躊躇などしていられなかった。

昔から人一倍正義感が強かった圭一は、総理と言う地位を利用し、この世の中を好き勝手に操る『悪魔』を放ってはおけない。

冷静に：冷静に物事を考え、練りに練った作戦をたてなければ、必ず自分は奴を殺す前に裁判所により理不尽な処罰を受ける事になるだろう。

恐らく死は免れられない。

そう思うと恐怖で身体が震え始める。
しかし必ず日本に平和を取り戻すと目つきを変え、そう遠くない総
理殺害の未来を見据えたのだった。

story?5 共犯者

次の日、何度も何度も試行錯誤を重ねた作戦の最終確認の状態に入った。

しかし、この作戦には一人の『共犯者』が必要となった。

圭一たった一人では不可能なことなのだ。

思い当たる男はただ一人だけだ。

そう考えた時には、圭一の足は自身の仕事場、『成人日常制限法管理部』へと向かっていた…。

「よう！」

モニタールームにある自分の席に腰を下ろすと同時に、名倉がいつものように手を上げ話しかけてきた。

圭一も気分はすぐれなかったが、「よう」と軽く返事をした。

腕時計に視線を移す。時刻は8時56分。9時から仕事が始まるので、時間的にはギリギリだった。

4分間、圭一は深呼吸を行い、辛い仕事内容を頭に浮かべた。

（今日は死亡者が出ませんように…）

毎日、決まりごとの様に、仕事開始直前に祈った。

祈りが終わり、目を開くと同時に時計が9時を指した。

デジタル式の時計が9時を表示するのを視線にとらえ、西垣が開始の合図を送り、仕事が始まった。

社員達の顔に緊張が走り、顔が引き攣る。

仕事開始から1時間。今のところまだ死亡者はいない。

圭一の心の中で、少しながら余裕が出てきた。

（何も無いままこのまま終わってくれ…）

圭一の思いもまた一段と強くなった。

……圭一の思いが伝わったのだろうか。何も無いまま、さらに2時

間が経過し、1時間半の昼休憩の時間がきた。

珍しく圭一は名倉を昼食に誘った。普段、仕事場では仲良く話すが、仕事内容が相当の為、仕事が終わればすぐに自宅に帰って、ベッドで眠り、朝を待つ。

これが圭一の日課であった為、名倉とともに飯を食べたのは今回で2度目だろう。：。前回はもう4年も前の事だ。新米の頃はお互いに励ましあったものだ。

そんな事を思いながら、圭一は近所のファミレス店の端の席に名倉と向かいあう形で座る。

「久しぶりだなお前と飯を食うなんて。今日はどうかしたのか？」
何も知らない名倉は呑気に圭一に問いかけた。

圭一が今日突然名倉を誘ったのは、言うまでもない。『例の作戦』の協力者になってもらおうと考えたのだ。

普段、食事には行かないが、名倉とはもう長い付き合いだ。彼なら信じられる。

しかし内容が内容なのだ。圭一はなかなか口を開く事が出来なかった。

名倉も何か深刻な事情があるのかと真剣な顔つきに変わる。

遂に圭一は重い口を開いた。

「おれ：総理を：伊藤銀司を殺そうと思う！」

周りの人には気づかれない様に、それでもって語尾を強調して言う圭一。

名倉の顔から血の気が引いた。

「お前：馬鹿かよ：」

名倉の額にジワリと汗が滲んだ。

「馬鹿なのは伊藤銀司だ！ アイツが日本を滅茶苦茶にしゃがったんだ」

つい興奮してしまう圭一を名倉は落ち着かせようとするが、圭一はつづけた。

「頼む名倉！ 言ってる事がめちゃくちゃなのは分かり切ってる！

でも：頼む！ 俺に力を貸してくれ！」

圭一は言葉を言い終えると同時に頭を下げた。

「……分かった……お前の事だ。人を殺す為のボタンを押す度に、相当傷ついたんだろう？ 理不尽なアイツが許せなかったんだろ」

圭一は言葉を発さず、コクリと頷いた。

「だったら力を貸すよ：掴まった時は一緒にムシヨでも入ってやる。死にそうなら一緒に死んでやる。ずっと支えあってきたんじゃないか」

そう言って名倉はとびきりの笑みを見せた。

「ならもう一つだけ話を聞いてくれ。俺が何故こんなに辛い仕事に就いたかの理由だ」

その内容を聞き、名倉の顔が引き攣った。

「そ…そんな事が…」

圭一は話し終えた時、思い出したのか目に涙を浮かべていた…。

s t o r y 5 共犯者（後書き）

感想などジャンジャンお待ちしております
w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6293x/>

奪われた日常

2011年11月12日14時22分発行